

おふでさきの 世界を歩く

第 1 回

山澤昭造

【やまざわ しょうぞう】

本部准員

天理教校本科研究課程主任

いま「おふでさき」を読む

ひながたの道を通らねば

教祖百四十年祭に向かう三年千日のこの大事な時
旬に、「おふでさき」について勉強させていただく
ことになりました。

今回の年祭にあたって発布された「諭達第四号」
では、次のような「おさしづ」が引用されています。
ひながたの道を通らねばひながた要らん。（略）

ひながたの道より道が無いで。

（明治22・11・7）

これは、教祖五年祭を控えた時期に下されたお言
葉で、「教祖様五年祭を目標に、三年千日の道を通
るようとおさしづ」（『おさしづ抄（二）』）です。教祖
年祭に向かって、どのように通ればよいかを、親神
様が直接、教えてくださったお言葉です。三年千日、
教祖の「ひながた」を目標（めど）に通らせていただくよう
にと諭されているのです。



今回の「諭達」では、この「おさしづ」を引用し
てくださったうえで、教祖の「ひながた」が強調さ
れています。教祖年祭の原点に戻って、あらためて
この句にしっかりと教祖のお心を求めて、「ひなが
た」をたどるよう望まれているのではないかと思う
のです。

教祖のお心を求めさせていただくとき

今日、世の中全体を見渡したときに、私たちは、
豊かな社会の中で暮らしているように見えて、その
反面、さまざまな問題が山積していて、その解決の
糸口さえ見つからない、前途が多難な閉塞感に包ま
れた時代に生きていることに気がつきます。

このよふハにぎハしくらしいるけれど

もとをしりたるものハないので (三 92)

このもとをくハしくしりた事ならば

やまいのをこる事わないのに (三 93)

なにもかもしらずにくらすこの子共

神のめへにハいちらき事 (三 94)

というお歌があります。世の中を見渡すと、みんな

にぎやかに、にぎわしく暮らしているように見える
けれども、その「もと」を知って暮らしている者が
ない。それがいじらしいと述べられています。現在
の私たちを取り巻く世界を指していわれているかの
ようです。

このようなときであるからこそ、起こってきた現
実の物事に対して、問題の中心をしっかりと見つけ
て通ること、物事の奥にある「をや」の思いを探る
ことが大切です。そして、私たちが、どのように生
き、どのようにそれを乗り越えていくのか、真実の
生き方ということが真剣に求められなくてはならな
いと思います。それには、「もと」を徹底してじつ
くりとたずねることだと信じます。

ご存命でお働きくださっている教祖のお心、教祖
の道を求めさせていただくときが、「いま」という
ときではないでしょうか。

コロナ禍を経て

私たちは、数年前、世界的な感染症の流行を経験
しました。社会や人々の暮らしのあり方が大きく変

化し、それまでの「普段通り」の生活がままならない状況がしばらく続きました。私自身、そのコロナ禍の中で感じたことは、普段の日々の生活を支えてくださっている親神様のご守護の世界にあらためて目を向けるときではないのかということでした(※1)。教祖が教えてくださった教えの根本にしっかりと目を向け、日々の信仰生活をもう一度足元から見つめ直し、改めていく。コロナ禍から数年が経ちますが、そのときに感じた思いはいまも変わりません。

「もと」をたずねるところに新たな活力が

「もと」をたずねるということ、教祖のお心を求めさせていただくということについて、中山正善・二代真柱様はかつて「復元」という言葉を用いて次のように述べられました。

復元と復旧とは決して同じ事を意味せないのであります。以前の姿に復し又懐旧の情に遊ぶのは、決して復元ではありません。あくまでも、元を極め、根源をたづねる所に復元の意義がある

り復元の活力があると信ずるのであります。

(中山正善『ひとことはなし その三 道友社、昭和21年』)

「復元」と「復旧」は異なる。昔の姿に戻ろうとすること、昔を懐かしんで思い出にふけることは「復元」ではない。教えの「もと」を極めようと、教えの根源をたずねるところに、「復元」の意義があり、そこから新たな活力が生まれてくるのだと述べられています。

現在は、スピードと効率化・能率化が重視される時代です。「もと」をたずねるといって、遠回りをするかのように聞こえるかもしれませんが。

しかし、そのような時代であるからこそ、大きな変化に対応するためにも、教祖は、私たちに何を仰せくださったのか、教祖のお教えくださった本筋は何であるのか、という点をじっくりと振り返らせていただきたいと思います。

「おふでとき」は神の言葉である

教祖のお心は原典の中にしるされています。そして、身をもってお通りくだされた五十年の「ひなが



た」の中にお示しくださっています(※2)。

教祖が現身うつしをおかくしになられてからもうすぐ百四十年を迎えようとしていますが、私たちは、「おふでさき」「みかぐらうた」「おさしづ」の原典、あるいは『稿本天理教教祖伝』をたずねることによって、教祖のお心を求めさせていただくことができるのです。

その中でも、「おふでさき」は、教祖がみずからお書きくださったもので、この道の根本とその道筋が示されています。

「おふでさき」は、明治二(一八六九)年から十五年にかけて、教祖が直接筆を執ってお書きくださいました。現在、出版されているものは一冊の本になっていますが、原本は十七冊に分けてつづられていて、その表紙にはそれぞれ号数が付されています。全部で千七百十一首のお歌から成っています。

「おふでさき」を執筆されるについては、親神様の仰せのままに、教祖が筆を持たれると、手がひとりでに動きだしたといいます。

教祖ご自身、このときの様子を次のようにお話しになっています。

神様は、『筆、筆、筆を執れ』と、仰おつしやりました。七十二才の正月に、初めて筆執りました。そして、筆持つと手がひとり動ききました。

天から、神様がしましたのや。書くだけ書いたら手がしびれて、動かんようになりました。

(『稿本天理教教祖伝逸話篇』「二一 おふでさき御執筆」)

「おふでさき」は、親神様が教祖を通して書かれたもの、つまり神の言葉であるということです。

ふでさきのせめ

「おふでさき」に何がしるされているのかということについては、次のように述べられています。

このよふハリいでせめたるせかいなり

なにかよろづを歌のりでせめ (一 21)

せめるとてでざしするでハないほどに

くちでもゆはんふでさきのせめ (二 22)

なにもかもちがはん事ハよけれども

ちがいあるなら歌でしらす (二 23)

「歌のりでせめ」とありますが、『日本国語大辞典 第二版』(小学館、平成13年)には「責める」の意味と

して、「①人の行為の過失や罪などをとがめる」とともに、「②つよく促す。しいて求める」とあります。ここで「せめる」といわれているのは、①の意味よりも、②の意味に近いのではないのでしょうか。

この世は「りいでせめたるせかい」、つまり、天理によつて成り立っている世界であつて、そのすべての理を「歌のりでせめ」る、すなわち、歌によつて「天理」を教え、納得させるといわれています。人間をお造りくだされた親である神様が、子供である人間にお歌をもつて天理を教えてくださいださつた話が「おふでさき」であるといえるでしょう。

なお、引用したお歌の中に「ふでさきのせめ」とありましたが、この「ふでさき」という言葉に敬称の「お」を付けて、「おふでさき」と呼んでいます。

話の台

「おふでさき」については、「おさしづ」の中でも、次のように教えられます。

これまでどんな事も言葉に述べた処とこが忘れる。
忘れるからふでさきに知らし置いた。ふでさき

というは、軽いようで重い。軽い心持つてはいけん。話の台であろう。取り違いありてはならん。(中略)これまで論し置いたる理は、仮名な柔らかい中に、要かな々の言葉論してある。

(明治37・8・23)

教祖は、これまでどんなことも話して説いてきたけれど、言葉で述べただけでは、人間はとかく忘れがちである。聞いただけでは忘れるから筆に書いて残したといわれています。そして、「話の台」であるのが、「おふでさき」です。話の台とは、話の土台、話の基礎という意味です。親神様、教祖が人間にお話をされるにあたって、その一番の基盤となる話が、「おふでさき」にはしるされているといわれています。

「おふでさき」に書かれていることは、単なる過去の出来事ではなく、今日にまで及ぶ、この世界のさまざまな事情を治め、人間をたすける根本の道が示されているといわれているのです。

私は母から、教祖様が参つてきた人々に誰彼の差別なくおふでさきを読めとおすすめた、という話を聞いた。(中山正善「まえがき」『おふでさき付

註釈（昭和3年）

と、二代真柱様は述べられていますが、その理由は「おふでさき」のこのような性格にあるのではないのでしょうか。

「おふでさき」は世界たすけに向けての地図

「おふでさき」「みかぐらうた」「おさしづ」の三つを原典といいますが、それぞれの原典には性格があります。

「話の台」である「おふでさき」は、教祖が直々に書かれたものであることから、原典の中で最も重きを置かれています。親神様が世界中の人間をどのようにしてたすけ、この世界を陽気ぐらしに導いているのか、ということが述べられています。「世界たすけに向けての地図」という言い方ができるかもしれません。

次に、「みかぐらうた」は、「おつとめ」の地歌として教えられたものですが、日常的な信仰の心得が、簡潔な言葉でしるされています。「おふでさき」が地図だとすれば、「みかぐらうた」はその地図を

頼りに歩くにあたって、毎日をどのような心で過ごせばいいのかということが歌われているのです。

最後に、「おさしづ」です。「おふでさき」という地図を頼りに道を歩いていても、いろいろな道のりがあります。いろいろな天気の日があります。山もあれば川もある、晴れている日もあれば雨の日もあります。そうしたときに、どのようにして道を歩いたらよいか、どのような気持ちで歩いたらよいかを教えてくださっているのが、「おさしづ」です。

要々の言葉論してある

先ほど取り上げた「おさしづ」のお言葉の中に、「忘れるからふでさきに知らし置いた」とありました。このことは、「おふでさき」に述べられている内容について、教祖は、それまでも繰り返しお話しくださっている、ということを意味します。「おふでさき」は、教祖のお話を前提としているということです。

そして、「これまで論し置いたる理は、仮名な柔らかな中に、要々の言葉論してある」といわれるよ

うに、「おふでさき」は、「要々の言葉」を論じたものです。

実は、これらのことは「おふでさき」を読ませていただくにあたって、とても大事な点を知らせてくださっています。私たちは、「おふでさき」といったら天理教の教理の基盤であるのだから、教理がすべて書かれてあるのではないかと考えがちですが、そうではないのです。「おふでさき」は、忘れやすいことに重点を置いて、しかも肝心なことが、要点だけしるされてあるのです。

「おふでさき」の背景には「話」がある

私が勤務している天理教校で、学生が「おふでさき」に見る「かしの・かりもの」の理というテーマでレポートを書く場合、「おふでさき」の中から「かしの」や「かりもの」という言葉がでてくるお歌を選びだしてきて、その意味を求めようとしています。ところが、実際にやってみるとよく分かるのですが、意外とうまくいきません。

たとえば、「おふでさき」第三号41、137のお歌に

は、次のようにしるされています。

にんけんハみなく神のかしものや

なんとをもふてつこっているやら (三 41)

めへくのみのうちよりのかりものを

しらずにいてハなにもわからん (三 137)

これらのお歌では、“人間はみな神のかしものである。なんと思つて使つていいのか” “身の内よりのかりものということ、知らずには何も分かつていないのと同じである”と論されていますが、「人間はみな神のかしものである」とはどういうことか」「身の内よりのかりものとはどういうことを意味するのか」という肝心な点については、前後のお歌を読んでみてもほとんどしるされていないのです。このほかにも、「おふでさき」の中で、「かしの・かりもの」の理について書かれたお歌はありますが、それが具体的にどういうことかと説明されている箇所はありません(※3)。

このように、教祖のおそばにいた当時の信者が、耳で聞いてよく知っているはずの話は分かりきったものとして省略されているのです。この場合ですと、「かしの・かりもの」の話は、すでによく聞いて

区切り方の例

区切りの代表的なものとして、『おふでさきのしおり』という小冊子がある。これは、中山正善・二代真柱様が、昭和34年12月27、28日に行われた婦人会第3回支部長・主任講習会において、お話をされたときのテキストで、中山正善『続ひとことはなし』（道友社、昭和26年）の「号別概説」を基に段落分けがされている。

現在、各教会で朝夕のおつとめの後、「おふでさき」を拝読するところも多いが、その際の区切りは、この『おふでさきのしおり』を参考に約20首になるように調整されたものであると聞かせていただく。

なお、『おふでさきのしおり』は、『みちのとも』昭和43年10月号に「おふでさき拝読のてびき」として掲載されている。（詳しくは、しかおあきお鹿尾昭男「原典と私」『みちのだい』第100号参照）

知っているものとして、原典の背景にあるのです。そうした当時の信者が耳でよく聞いて知っているはずの話であつたり（※4）、それまでの教祖の道すがらの意味するところであつたり（※5）、そうしたものをよく理解していないと「おふでさき」を深く読むことはできないということです。

この連載では、そのようなお話や史実について、できるだけ考慮に入れながら解説をしたいと考えています。

「おふでさき」を読むということ

編集部からの依頼は、「おふでさき」を段落ごとに区切って解説してもらいたいということです。

「おふでさき」は、一見すると、たくさんのお歌がバラバラに並んでいるように見えますが、そうではありません。いくつかのお歌がまとまって一つの話を形づくっています。その意味のまとまりが「おふでさき」の「段落」です。

「おふでさき」を読ませていただくにあたって大切なことは、お歌に区切りを入れて、段落を見つけることです。ある程度のまとまりをもって読むことによって、「おふでさき」に書かれていることを理解することができ（上コラム）ます。

段落によって読み進め、さらに、その段落相互の関係を考えながら、読ませていただく。これによって、「おふでさき」を体系あるものとして読ませて

いただくことができると教えられます。

この、お歌を段落ごとに読むということ、あるいは「おふでさき」を体系的に読むということについては、

芹澤茂『おふでさき通訳』（道友社、昭和56年）

という本があり、この中で詳しく解説されています。この連載では、こうした先学の研究に深く学びつつ、段落ごとにお歌の意味を求めていると考えています。

私は、「おふでさき」を読むということは、「おふでさき」が指し示す世界を読むということではないかと思っています。それは、教祖が見ておられた景色、教祖のお心でもあります。

二代真柱様は、「おふでさき」を読むということについて、次のように話されました。

おふでさきを直かに読まして頂く、私達はそれによつて、教祖のお声を直かに拝聴することと同じ理を心に得るのであります。（略）

教祖の声は直かに私達の耳に聞くことは出来な
いでありましょう。しかしながら、おふでさきを
読まして頂くことによつて、教祖の御守護をまざ

まざと目に見せて頂くことによつて、私達は存命の教祖に御指導頂いておる訳になるのであります。

（「立教一三〇年よのもと会日光会総会に於けるお話」真柱訓話集 第27巻〈昭和42年度〉）

私たちは、教祖のお声を直接耳にすることはできない。しかし、「おふでさき」を読ませていただくことによつて、教祖のお声をじかに拝聴するのと同じ理を心に得ることができる、「おふでさき」を読ませていただくことによつて、私たちは存命の教祖に直接ご指導いただいていることになるのだといわれています。

一里の道も、急せいて行つては、しんどいと言わ
にゃならん。十里の道でも、ぼち／＼行ゆけばそ
の日にけける。この理聞き分け。

（明治34・4・16）

と教えられます。これから、ゆつくりではあります
が、「おふでさき」の世界を歩かせていただくこと
で、ご存命で先頭切つてお導きくださっている教祖
のお心をしっかりと求めさせていただきたいと思
います。お付き合いますよう、どうぞよろし
くお願いします。

おふでさき
の世界
を歩く

- ※1 山澤昭造「『かりもの』のご守護の世界に目を向けるとき」(『あらかとうりよう』第280号、立教183年) 参照。
- ※2 『稿本天理教教祖伝』では、このほかにも日々現れてくる「ふしぎなたすけ」のなかに、教祖の親心を感じさせていただくことができると教えられている。
- 「我々は、この親心をおふでさき、みかぐらうた、おさしづに拝し、ふしぎなたすけに伺い、教祖の面影や足跡に偲ぶ」
(165ページ)
- 「……日々現われて来るふしぎなたすけこそ、教祖が生きて働いて居られる証拠である」
(336ページ)
- ※3 ここで述べた「おふでさき」と「かりもの・かりもの」の理という事柄については、澤井一郎「『おさしづ』におけるかしもの・かりものの理——『おふでさき』および「こふき話」の理解をふまえて」(『天理教校論叢』第41号、天理教校本科研究室、平成23年) という論文で、詳しく論じられている。
- ※4 芹澤茂「おふでさきの教理体系についての覚書——おふでさき解説序説」(『天理教校論叢』第10号、昭和46年) は、「おふでさきの教理説明
- については、こふき話の内容が暗黙のうちに前提されている」として、この点が、「おふでさき」の解釈において非常に重要な点であると述べている。
- ※5 澤井勇一「おふでさきを読む」(道友社、立教161年) は、原典の背景には、文字になって原典が残されるまでの天保9年からの二〇年三〇年が存在しており、このところを理解させていただくことが、「おふでさき」を理解する上で、極めて重要であると指摘している。(特に同書「第二回 原典成立の背景」を参照)